

《罌堂塾・講演録》

政治とインターネット

——東京都議会議員選挙を事例に

高橋 大輔

(尾崎行雄記念財団研究員・IT統括ディレクター)



高橋大輔（たかはし・だいすけ）

一般企業に務める傍ら、罌堂塾（十二期）卒塾。十四期、十五期とのべ三期にわたり学んだ後、十六期より運営委員として後進の育成をサポート。ネットポリティクス分野への関わりは二〇〇七年と古く、「ヒゲの隊長」佐藤正久・参議院議員の初陣をはじめ衆参の国政選挙・地方自治体の選挙戦で数多くのインターネット戦略をアドバイザーしてきた実績を持つ。現在は研究員・IT統括ディレクターとして尾崎財団のインターネット発信全般に携わる。

(一) はじめに

私たち尾崎行雄記念財団・罌堂塾は特定の政党や主義主張に偏らない、不偏不党を掲げています。不偏不党だからこそ、色々な立場の人が集まります。政治家や選挙候補の方も同様で、さまざまな自治体で活躍する人、国政や首長に転じた方もいます。

この秋（二〇一七年十月）の衆議院総選挙、そして全国各地の首長選挙と並んで話題となった選挙が、六月から七月にかけて行われた東京都議会議員選挙です。都議選を通じて私が感じたことをお話ししたいと思います。これまでも地方選挙や国政選挙のインターネット発信を十年以上に渡って眺めてきましたが、今回お伝えしたいのは、その中でも見逃されがちで、けれども大事なことです。それを皆さんと一緒に考えていきます。

現在二期目となった都議会議員で、川松真一朗さんという方がいます。テレビ朝日のアナウンサーから政治の世界に転じて現在に至りますが、個人的なご縁もあってわずかながら先の戦いを応援しました。今回の東京都議選がどのような戦いだったのかというと、小池百合子知事が率いる地域政党「都民ファーストの会」が旋風を巻き起こしました。結果、それまでの与

党であった自民党は大敗を喫しましたが、そうした中でも勝ち残ったのが川松候補でした。

なぜ、逆風の中でも再選を果たすことができたのか。日頃の地道な活動もあれば、盤石な組織力もあったことでしょう。それでも、ここではあえてそうした部分とは別に、インターネットの視点から捉えた私なりの分析を試みたいと思います。

(二) 初のインターネット選挙をいかに戦うか

実は川松さんも、この憲政記念館で尾崎行雄の精神を学んだ罌堂塾の同窓だったりします。もともと川松さんの場合は「政治特別講座」という短期集中プログラムでしたが、選挙に挑む人と応援する人が共に罌堂塾で学んだ、ある意味で尾崎行雄を背負った戦いでした。

どういう応援をしたのか。本当に狭い、ごく限られた範囲です。都議として一期四年間の活動実績もあるので、ホームページやSNSもそろっている。動画なども他の候補や議員に比べて精力的に取り組んでいる。

だからこそ私が何かを制作し、特定のツール運営をサポートする必要もなかったわけですが、これまでの

活動の棚卸し、そして選挙戦に挑むにあたって何を訴えるか。その辺の提案を行いました。

二〇一三年の参議院選挙から期間中のインターネット発信、いわゆるネット選挙が解禁され、投票の呼びかけや有権者への訴えも制限付きながら行えるようになりました。前回の都議選は解禁の直前だったので、今回が実質的なネット選挙の初陣だったわけです。

使える道具はそろっている。ただ、それをどう使いこなすか。宝の持ち腐れにさせず、どうやって効果的に自らの主張を有権者に届けるか。その辺を整理したうえで、情報の取捨選択や精査、場合によっては駄目だしなどの提案をしました。

しばし、一緒に考えてほしいことがあります。想像してみてください、校正や添削のない新聞や書籍。あるいはノーチェックのニュース原稿。普通に考えるとあり得ないでしょう。政治家のインターネット発信は、実は多くがそうした状態に陥っているのです。ホームページやSNSもソーシャル「メディア」である以上、発信の精査が必要です。けれども、実際にはそこまで手が回らない、そうした政治家や選挙候補が大半です。中には、本当にこんなことを発信して良いの

か!?!と目を疑うものもあります。

これが総理大臣や閣僚の方なら、公式な発信が破たんすることはまずありません。幾重にも入念な確認や推敲を経て情報発信を行っているからです。それでも、たとえば立場を束の間はなれた大臣や、政党の要職を務める方でも足元をすくわれる事があります。しかも、ネットの世界ではネガティブな情報ほど拡散のスピードが速いです。選挙期間中は、ちよつとした発信が命取りになる。だからこそ、そうしたリスクの芽を可能な限り取り除いていく必要があります。これらのネット選挙は、そうした視点が欠かせません。

テレビ局出身の川松さんは、情報が誤って流されることの怖さやリスクを職業的にも経験している。経験しているからこそ、自らの発信に対してチェックする役割の必要性を感じ、二期目をかけた戦いに挑んだわけです。小言をいうのが私の役割でした。

(三) これまでの発信を総点検する

川松さん自身はホームページにブログ、ツイッター、フェイスブックにユーチューブ、インターネット発信を行う上でのツールを一通り使っています。ほぼ

フルスペックと言ってもよいでしょう。そうした中で、何を一番の武器に戦ってもらうか。私がつとも共感したのは、実はブログでした。

テレビ局出身の候補というと、おのずと動画を連想させます。実際に「KawamatsuTV」というチャンネルを自ら運営し、精力的に配信しています。ツイッターもこまめにやっている。けれども、インターネットの発信ツールにはそれぞれ一長一短があります。

たとえばツイッターは気軽に発信を行えますが、文字数に制限があります。フェイスブックは文字や画像のほか動画投稿もできますが、改行や字切りなどのレイアウトが自在とは言えません。

そして動画。これは視聴覚に訴える効果はありますが、何よりも観る人の時間を容赦なく奪います。なぜ、テレビのCMが通常十五秒の尺なのか、長くてもせいぜい三十秒なのか。視聴者の注意を引き留めるには限界があるからです。

ならば、ブログはどうか。発信者の負担はたしかに一番大きいです。何しろ文章をこしらえなければなりません。構想を練り、推敲するのもそれなりの時間が

かかります。けれども、しっかりと練り上げ、主張が込められたものであれば、もつとも自身の考えを訴えやすい。手間がかかる分、一番の訴求力があるのはブログだと私は見えています。

事実、これまでの候補の歩みを再確認する材料としたのは、他のSNSでなくブログでした。確認対象のほぼ全てだったと言って良いでしょう。その中で、これまでの四年間、どのような活動をしてきたのか。どんな想いを抱いてきたのか、普段何に注目しているのか。「いちばん身近な読者」として、スポットを当てたい主張や政策を拾い上げて行きました。その中には、都議選の直前で小池知事自ら豊洲への移転を表明した築地の市場問題や、二〇二〇年のオリンピック・パラリンピックについても持論が展開されていました。

(四) 選挙期間中に、有権者が知りたいことは何か

これはネット選挙の第一人者として有名な高橋茂さん（武蔵大学講師・世論社代表取締役）の受け売りなのですが、選挙期間中に有権者が知りたい候補者の情報は三つに集約されます。

過去、現在、そして未来。これまでどんなことをしてきたのか、現在は何をしているのか。そしてこの先、何をしたいのかということ。その三つのポイントで川松候補の四年間、さらにはテレビ局を退職して政治の世界を志した以降の六年間の整理を試みました。その結果としてリクエストしたのが、三本のブログ記事でした。

一つめは、これまでの「総括」、振り返りです。選挙に初挑戦する立場ならば、理想を語るだけでも良いでしょう。けれども、現職ならば結果と実績に対する説明が必要です。そして何よりも、今回は避けて通ることのできない三つの壁がありました。①二〇一四年の都議会で起きた、いわゆる「セクハラ野次」問題。②二〇一六年の東京都知事選挙で出回った、ある一通の「触れ書き」。③都議選直前で一躍注目を浴びた国會議員の、秘書への暴言問題。

私自身も一人の有権者として、「都民は覚えているし、もちろん私も忘れてないよ」と伝えました。なるべくならば触れたくないだろう、それでもあえて正面から向き合って貰うことを求めました。その上で、各々の出来事に対して、都議會議員の一人としてどう思う

信力の持ち主もいます。そうした中でも、なぜ川松候補のブログ記事だけが転載されたのか。恐らくは、様々な問題から逃げたりごまかしたりすることなく、真正面から取り組もうとした姿勢が注目を集めたのではないかと私は見えています。

選挙中に自らのインターネット発信が注目を集め、そして拡散する。狙って出来るものではないでしょう。それでも一球入魂のごとく、ひとつひとつの発信に願いを込める。一人でも多くの方に届いて欲しい、伝わって欲しい。そういう祈りを込めての投稿だったそうです。その想いは有権者にも通じたのではないでしょう。

（五）あえて「弱さ」をさらけ出す

二つめにリクエストしたのは、政治的な訴えよりも内面的な、パーソナルな部分でした。今回の選挙区で一番のライバルは、都民ファーストの公認で二十代、一児の母という方でした。候補同士を並べても、体躯のがっしりした川松候補に比べると、相手のか弱さが際立ちます。だからこそ、本来ならば出たくない「弱さ」もあえてさらけ出してもらうことを望みました。

か。政党の一員として何を感じるか。そして、活躍する場こそ異なっても同じ政治家として、自ら発する言葉の重みをどう考えているか。有権者の関心に応えるべく、その辺を語って欲しいとリクエストしたので。可能な限りの情報開示と、説明責任を果たす。それを抜きにして、選挙の時だけ頭を下げて支持を求めることは許されない。そう思いました。

そうしたやりとりの中から彼が出した答えが「この四年間を振り返って―川松真一朗、全力のお願い」というブログ記事でした。投票日の三日前、これ以上早くても、逆に遅くてもいけない。今しかない、そんなタイミングで公開されました。私が知る限り、先の三つの問題に正面から向き合ったのは、全ての自民党候補の中でも彼ただ一人でした。

嫌なことからも、決して逃げない。ツイッターや動画では、部分的にしか伝えることのできないものです。渾身のブログ記事は、**言論サイト「アゴラ」でも紹介され**、そこから検索ポータル「ヤフー」にも転載される形で拡散しました。都議選においては川松候補のほかにも、インターネットでの発信力が注目を集める方が何名かいます。ブロガー議員と称するほどの発

二〇一三年の東京都議選に初当選する前、川松さんは二〇一一年の墨田区長選挙と翌年二〇一二年の衆議院総選挙で、それぞれ次点での苦杯を味わっていました。そのときの心情にも、あえて触れてもらいました。ともすれば古傷をさするようなものでしたし、触れられたくもなかったかも知れません。それでも、私はあえてそれを出して欲しいと思いました。

一見矛盾するようですが、当人が恰好いいと思っていることでも、実は恰好悪いことのほうが多いのです。その逆もしかりで、恰好悪いと思うことが実は恰好よく、そして潔いのです。

なぜ、二度の苦杯を味わっても政治の道をあきらめなかったのか。弱さと裏表の、真の強さは何なのか。**「夫として、そして一児の父として」というタイトルで二**本目のブログ記事が放たれました。記事では、政治の世界で語られる三つの坂（上り坂、下り坂、そして「まさか」に対する本音や、そして彼が踏ん張るきつかけとなった家族の姿が赤裸々に描かれています。

（六）自らの信念と「政治哲学」を訴える

ネット選挙が解禁された現在でも、投票日の当日は

発信が規制されています。したがって前日までがネット選挙の最終日になります。

ブログも投票日の前日夜までが最後の投稿になるわけですが、幸いにも前回、前々回と注目頂いた発信をどのような形で締めくくるか。第三の矢となる最後の投稿に対しては、哲学を存分に語ってもらうことを望みました。先の高橋茂さんが掲げた過去、現在、そして未来がネット選挙における発信の三原則ならば、それとは別に私自身がすべての政治家、あるいは選挙候補者に語って欲しい一番の大原則であり命題、それが「自身の政治哲学」でした。

あなたにとって、政治とは何か。どんなに言葉の技巧を工夫しても、己の信念や哲学といったものに裏打ちされていなければ、有権者には響かないと思ったのです。尋ねてみたところ、川松候補も同じ意見でした。ここだけは私も少しばかり加勢する形で、互いのアイデアをぶつけ合いました。

選挙期間、川松候補は四年前の都議選初挑戦に引き続き、石破茂・元地方創生大臣から応援演説を頂いています。選挙戦前半のブログで、恐らく都議選に挑んだ全候補の中でも唯一の文字起こしを行っており、それが後々の導火線になりました。良い演説は、聴いて

も読んでも良いのです。演説から文字原稿へ、あるいは原稿から演説へ。そうした可逆性があります。実際、応援演説の全文はとても読みごたえのあるものでした。これからの選挙戦では、有力な応援演説の文字起こしは必須の定番になるでしょう。川松候補の陣営ではそれが実践できていました。応援の翌日にはブログやホームページに掲載されていました。

そうした中で、私は川松候補に「この期間だからこそ語ってほしいこと、訴えてほしいこと」を探していました。敵失を狙ったりネガティブキャンペーンを展開したりするのではなく、正々堂々と他党との違いを訴えるとしたら、何かがあるのか。都民ファーストは清新さが感じられ、可能性を連想させる。一方で自民党には圧倒的な歴史と、国政においては政権を担ってきた実績がある。それを、ブログ上で「書く」のではなく「語らせたい」。

今でこそ私は東京都民ですが、元々は地方の出身です。都民の、つまり有権者の大半は私のような「田舎者」で、それぞれのふるさとを持っている。脳裏に浮かんだのは、石破元大臣にとって政治の師でもある田中角栄総理の「日本列島改造論」でした。その結びの部分で、奇しくも川松候補が主張する豊洲市場の移転

論と重なりました。案の定、読書好きの彼は同書の存在を熟知していました。豊洲への早期移転は東京都だけのためではなく日本全体のためにもなる、経済活性の起爆剤になると、一回り大きなスケールで移転問題を捉えていました。都民ファーストの会は地域政党なので、全国規模の政策論を語ること自体が難しい。有権者にとっての原風景を想起させるのはこれかな、と思いました。

私の提案に対して川松候補が持ち出したのは、選挙期間中に応援演説で入られた岸田文雄・外務大臣を通じて語られた、大平正芳総理の「楯円の哲学」でした。田中総理と大平総理、二大宰相の言葉を借りる形で、そこから候補自身の政治哲学につなげようというアウトラインが見えてきました。その上で、川松候補自身にとつての政治とは何か。改めて問いかけたところ、返ってきたのが次の言葉でした。

(七)「政治とは、決めること。そして決めるとは、自ら泥を被ること。」

「政治とは、決めること。そして決めるとは、自ら泥を被ること。」

これが問いかけに対して返って来たもので、ほぼ即答でした。聞けば、ある先輩政治家から教わったことが今も脳裏に焼き付いているのだそうです。

これはいい。いや、これこそがいい。私自身もそう感じ、最後はその言葉で結んで欲しいと願いました。ネット選挙最終日を飾った、結びの一番ならぬ一本。そのタイトルが本章にも掲げたものでした。誰がその言葉の起源か、原典か。そのこと自体は重要ではありません。己を奮い立たせ、鼓舞する言葉を持っているか。あるいは血肉になっているか。それが、当人にとつての政治哲学ではないかと思っています。

実は川松候補の選挙戦最後のブログ記事には、元になるものがあります。告示前の六月三日、「**決断という政治の業—豊洲移転問題によせて**」という記事を綴っているのです。短稿ながらも、選挙戦で発信した主張を網羅する形で凝縮されていました。それを拡張しつつ見直し、最後に持ってきた。これが、少なくともインターネットの分野においては他の候補との違いを際立たせることになったのではと私は見えています。

もしも私たち有権者が、選挙の際に各候補者の発信や訴えを比較し、投票する際の判断材料とするなら

ば。経歴や知名度、外見などの表面的な部分、あるいは「風」だけでなく、そうした全力の訴えが信じるに値するか。いま言っている事が、これまでの言説と食い違ってはいないか、一貫性はあるか。そういった部分は判断材料としても決して小さくない。今回の都議選を見て、改めてそう感じます。

（八）憲政の父・尾崎行雄にみる選挙発信

この罫堂塾は尾崎行雄の信念や精神について触れる場でもあります。ここからは、尾崎がこれまで連続二十五回、六十三年にわたり国会議員であり続けた事実にも照らし合わせてみたいと思います。

当然ながら尾崎の時代はインターネットこそありませんが、自らの演説を当時珍しいレコードに吹き込んだり、のちに全集を発行できるほどの著作を出版したり、同時代の政治家と比較しても圧倒的な発信を続けて来ました。尾崎自身も後に著書などで述懐していますが、これまでの二十五回の衆議院選挙でもっとも危機的な状況にあったのが、第二十一回総選挙、いわゆる翼賛選挙でした。翼賛選挙において尾崎行雄を象徴する出来事といえば、田川大吉郎の応援演説に端を発

する「不敬事件」が一般的に知られています。

演説による逮捕は尾崎にとっても予期せぬ不意打ちでしたが、一方で自身の選挙には田川の応援以上に相応の覚悟をもって臨んでいます。ここから紹介するのは、**尾崎行雄が三重県の有権者に向けて自らしたためた選挙公報**です。一部を現代の仮名づかいにしていますが、ぜひとも当時の気迫を感じてください。また国政・自治体を問わず、選挙に挑んだ経験をお持ちの方はご自身の公報と読み比べて頂ければと思います。



三重県第二選挙区選挙人諸君に告ぐ

衆議院議員候補者 尾崎行雄

今日まで五十余年間諸君の推薦によって、議員をつとめておる間に大分年をとりましたから、もう公の生活をやめ、余生を風月の間に送ってもよいのでありますが、ただ一生国事を目的に暮らした私としては、最後の御奉公をしないで、公の生活をやる訳には参り

ません。

是非とも君国のために最後の御奉公を致したいのでありますが、それにはこれまで、一生を立憲政治のために送って来たのでありますから、やはり議員としてでなければ適當の御奉公は出来ないと、思います。

その訳を簡単にお話すれば、我が国の如く世界に類例のない有り難い皇室を戴いておる国柄に於いても、徳川時代、北条時代、足利時代等がありました。然らば下の人民の方とは云えば、斬り捨て御免の世の中に生存しておったので実に哀れはかなきものがありました。

かくて上は皇室の御悲運となり、下は人民の不幸となり、長く続いたために国家の発達は遅々として進まず、神武天皇以来二五〇〇余年を経ても全国の人口わずか三千万人ほどに過ぎなかったのです。然るに今日は内地だけでも七千万人に増し、朝鮮、台湾を入れれば一億人に達しております。

また明治の初めには政府の歳出は三、四千万円に過ぎなかったのですが、今日は平生でも二〇億円、今年の如く軍事費を計算すれば二〇〇、二三〇億円になって、明治二十三年初めて国会を開いた時のほ

とんど三〇〇倍になっております。

実に明治以後の国運の進歩は驚くほどであります。が、これには内外幾多の原因がありますけれども、その内最も大切かつ重大なものは、明治天皇のお働きと考えます。

天皇には御即位の始めに当たって「万機公論に決す」と仰せられ、その他四条を天地神明に誓わせ給い、その後引き続いて非常の御苦心をもって憲法と皇室典範をご制定に相成りました。それがために人民の幸福安寧は確実に保証せられ、将来この憲法が存する以上は何人が出て、決して人民の幸福を害することは出来ないうようにお定めになりました。

私もこの大御心を奉戴して、先輩および同志の人とともに身を擲って立憲政治の制定、立憲政治の発育に尽力し、進んで政党を組織し、選挙により多数の投票を得た政党に内閣組織をお命じになる様にすれば、皇室のためにも人民のためにも最も安全な方法と考えました。

然るにその頃の政府は我々のごとく政党内閣論を唱える者を国賊と罵って、帝室内閣と称する方法を主唱しました。しかしその主唱者たる伊藤公（伊藤博文）

や桂公（桂太郎）の如きも実行の末、その過ちを悟ったものと見えて遂に自分から進んで政党を組織し、その首領となる様になったのでありますから、即ちこの点において私どもは勝利を得て立憲政治の正しき道が漸次おこなわれる事になりました。

その結果、世間では政党内閣を国賊と見ないのみならず、これを「憲法の常道」と称えるようになって、全国の大新聞でもみな憲法の常道を主唱するようになった。然るに悲しいことには政党の人々が段々腐敗を致しまして、ただ多数の投票を得て、政權を握りたいがために不正の手段を施して、賄賂その他の悪事をなし、政党の候補者に多数の得票を集めるようになりました。それではいかに多数であっても正しいものではない、内部から百万これに忠告してこの不正の手段を改めさせようと尽力致しましたが、不幸にして無力の致すところ、目的を達することが出来なかった。その故に憲政会も政友会も皆その始めにおいては、私は組織者の一員となったのであります。

けれども、その為すところが私どもの目的に叶いませんから、これを離れて政党の外よりこれを矯正しよう

うと思ひ、今の政党のやり方で多数を得たのでは、この上内閣を組織させる事は決して憲法の常道ではないのみならず、逆道である。これを改めなければやがて政党は自滅するより他はないと頻りに唱えました。けれども日本大多数の人々は私をほとんど気でも違つた者のように考へて、憲法常道論を主唱しておりました。

その内に政党の信用は段々減少して、遂にご承知の如く今日は自分から政党を解散して、無政党の世の中になった。しかし立憲政治が正しい政党なしで行われようとは私は思いません。こういう風にして段々立憲政治の發達が鈍くなつて行きますと、あるいは多数を得た党派に内閣を組織させるような多数決は、民主主義であるからどうしてもこれを改めなければならん等と云う事を申す者すら出て来ました。

無論、万機公論に決すという以上は、多数決になる他はないのであつて、それを民主主義であるから悪いなどと云う事は、全く憲法を理解しないものであるのみならず、その本文も読まない人々ではないかと思ひます。

また同時に日本の憲法論者は、多くは英米に親しい

ものであつて、英米は自由主義の国であるから悪いなどと申しますけれども、これはまた驚き入つた意見で、憲法を開いて見れば、第一章においては天皇の大權をずっとご規定になり、第二章においては人民の權利義務自由を保証されたもので、第二章のおよそ十カ条ほどはことごとく人民の權利と自由を保証したものであります。

全国の選挙人たるものは憲法の条文くらいは一通り読んで、この折角人民のために自由と權利を保証したところの十カ条以上の憲法の条文を、反古にするような意見に賛成しては相成りません。

また、明治天皇には、憲法は不磨の法典であるから、将来改正しては相成らん、独り憲法のみならず皇室典範も改正しては相成らん、もし他日改正の必要が起つた時には、天皇自ら発案するか、あるいはその子孫をして発案せしめ、貴衆両院の三分の二以上の出席と、三分の二以上の賛成とを得なければ一字一句たりといへども改正することは相成らんぞと、憲法において仰せられているのみならず、附属の御詔勅においても仰せられております。選挙人たるものはよく心得ておかねばなりません。

要するに衆議院議員の選挙というものは、我が国に古来おこなわれておる所の道と同じようなもので、きわめて公平に敵味方を全く同等の位置に立たせて、公平なる投票を集めることの出来るようにしなければなりません。すなわち角力（＝相撲）は同じように真裸でどちらも道具を持たないで勝ち負けを決めさせる。

しかるに従来おこなわれた所の選挙の内には、ともすれば、この角力と同じように取らせなければならぬところの選挙に、他の方には四十八手のうちに許された手、すなわち憲法法律が許してあるところの弁論場裡において、大層間違つた事がありました。

万機公論に決すべしと仰せられた大御心は欽定憲法の大本です。ゆえに私は是非ともこの点に向かつて最後の御奉公をしたいのであります。

この目的のために今回も老年をも省みず、選挙場裡に立ち成敗利鈍を問わず、諸君にご相談をする訳であります。



議員人生五十年の総決算を行うと同時に、選挙のあ

るべき姿を相撲に例えるなど、硬軟を織り交ぜる工夫が見られます。静かな出だしから始まって、次第に大きなテーマや主張に向かう。こうした修辭法をクライマックス（漸層法）と呼びますが、尾崎はクライマックスという英語をわが国で初めて訳した人物でもありました。当時の訳は追次進歩（ついじしんぽ）という四文字で現在は普及していませんが、獅子吼（ししく）と呼ばれた尾崎の雄弁を支えたのは、じつはこうした修辭技法の数々でもありました。二十歳を前に初の著書『公会演説法』を訳述して以来、尾崎は欧米から採り入れた演説や表現の技法を半世紀以上に渡り試行錯誤してきたのです。

軍部の検閲をくぐり抜けたこともあり、この依頼文には過剰なまでの煽り文句は見られません。一方で、行間を読み解けば痛烈なまでの翼賛選挙批判であり、不勉強な有権者に対する叱責でもあります。むしろ、軍部よりも有権者に対する姿勢のほうが厳しい。選挙当時、尾崎の年齢は八十四歳でした。「人生の本舞台は常に将来にあり」という座右の銘を、このように実践していたのです。検閲を覚悟しながらも、それを突破することを念頭に置いて、自らの言葉を練り上げ

た。老骨に鞭打ちながら、自らの覚悟を示すことで「誰が正しいかではなく、何が正しいか」を最後まで有権者に問い続けた。

現代の政治家から見たら、尾崎の流儀は古いものかもしれません。それでも、こうした信念に訴えるやり方、そして言葉を極限まで研ぎ澄まそうとする感覚は、インターネットの有無や置かれた時代に関係なく、また選挙時の発信に限らずとも、大いに参考になるのではないでしょうか。

（九）都議選の後日談

ここで再び、都議選の話題に戻ります。

のべ九日間にわたる選挙戦で、川松候補は二期目の議席を与えて頂く事ができました。結果は一七五〇七票、選挙区に割り当てられた三議席中三番目というきわどい戦いでした。再び活躍の場を与えて頂いたこと自体は有り難いのですが、私の中では割り切れない思いがありました。

所属する政党にとっての大逆風の中、その勝利は奇跡の逆転劇とまで言われました。しかしながら次点で涙を吞んだのは、候補にとって同僚でもあり、先輩で

もある方でした。お互いに死力を尽くしたはずなのに、当落を分けた得票差ばかりが目される。マスメディアの無情さを感じました。

勝利後の発信を、どのように再起動させるか。私も氣を揉んでいました。ほどなくして、再び都議の職責を預かることになった川松候補からも相談を頂きました。当選の弁を発信するに当たって、私からは三つのリクエストを出しました。①次点との差は語らず、頂いた一七五〇七票に想いを馳せる。喜び満面の画像は控え、あくまでも厳肅に結果をかみしめること。②有権者の皆さんに誓いを立てる。当選後の公約として「職務の宣誓」をおこなうこと。③恰好い政治家を目指すこと。

果たして、どう応えてくれるだろうか。その答えは翌日「感じたなら、動く」というタイトルのブログ記事で示されました。

以下は当選から二日後、当選二期目の第一歩を飾った川松都議のブログからの引用です。



六月二十三日に告示された東京都議会議員選挙。結果は一七五〇七票のご支持を頂き、二期目の職責を与えて頂くことができました。地元墨田の有権者の皆様、そしてインターネットを通じて声援をくださった多くの皆様。この場をお借りして、篤く御礼申し上げます。

結果を受けて改めて感じますのは、私は変わっていないかなければならないという事です。

選挙戦を振り返っての総括は改めて皆様にもご報告の機会を設けたく存じますが、頭に浮かんだのは十八世紀のイギリスの歴史家、トーマス・カーライルの言葉でした。カーライルは次のような言葉を残しています。

「変化は苦痛だが、それは常に必要なものだ。」

我われ自民党も、今回の選挙結果と真摯に向き合い、そして変わっていかねければなりません。私は今回皆様から頂いたご支持を、そう受け止めています。

どんな風に、変わらなければならぬのか。その探究はこれからですが、今後私たちが目指すべき政治のあり方を一言で申し上げるならば「感動する政治」が挙げられるのではないかと感じています。

感情をあらわにする、心を動かすという辞書的な意味ではありません。感じたら、動く。感じたら、行動する。行動と結果で、言葉に新たな意味を与えていく。政治という言葉が伴うイメージも、不信や疑念から、安心や期待という言葉とセットで語られるよう積極的に汗を流して参ります。

四年後、政治という言葉が連想させるのはどんな言葉か。

一七五〇七票の重みを胸に、決して驕ることなく都政に取り組んで参ります。



(十) 最後に——罫堂塾という産屋^{うぶや}

本日の講義を終える前に、皆さんにはぜひともイメージして頂きたいことがあります。恰好い政治家は、どうすれば増えていくのか。そして良い政治とは、どうすれば根づいていくのかということですが、

私が思うには、その答えは日本のルーツにあるのではないかと、そう考えています。わが国最初の書物「古事記」には「**黄泉の国**」という物語が描かれています。概略は省きますが、イザナミの神様が黄泉比良坂（よもつひらさか）で「一日千人の命を奪う」と言うのに対し、イザナギの神様が「あなたがそうされるのなら、こちらは一日千五百の産屋を建てよう」というくだりで締めくくられる物語です。

政治の世界でも、同じことが言えるのではないかと思います。カーライルの言葉ではありませんが、国民や有権者が良い政治家や正しい政治を心から望まなければ、政治は次第に悪くなる。放っておいても、どんな悪くなる。ならばどうするのか、恰好い政治家を増やしていくしかない。これに尽きるのではないのでしょうか。

どんな政治家が恰好いのか。それは人により異なる

掲げられた画像は、当選の喜びではなく、全力で戦い、持てる全てを出し切った——そう感じさせるものでした。**トーマス・カーライル**という名前は聞きなれない人も多いかも知れませんが、「この国民にして、この政府あり」という格言が有名です。もしかしたら、退去命令を受けて渡英した若き日の尾崎も学んだ言葉かも知れません。

政治家という職業の評価は、リアルタイムで判断することが難しいものの筆頭格にあげられると私は思います。中には何年たっても結果が出にくい、場合によっては百年後によりやく評価が定まることも稀ではありません。実際に、尾崎行雄もそうでした。ある時は非国民と罵られ、また戦後は凱旋將軍のごとく手のひらを返す歓待でもはやされました。

二期目の都議会議員として再び走り始めた川松真一朗さんが進む先は、今の時点では私にもわかりません。ただ、都議選の前後を通じて見守るかぎりでは、尾崎が選挙公報で訴えた角道（相撲道）ならぬ「政治道」をおれることなく歩んでいるのかなと思います。また、そうあり続けて欲しいと願っています。

るでしょう。それでも「こんな政治は嫌だな」「この政治家は恰好悪い」そういう判断基準を養い、その逆の視点で政治の質を高めていく。そのための場がここ、罫堂塾であると私は確信しています。中には川松さんのように政治を目指す人もいます。あるいは私のように、有権者の立場で良い政治家を増やしていく事に意味を感じる人もいるかもしれません。いずれの立場であっても、罫堂塾はそうした想いにこたえられることのできる産屋であり、あるいは揺籃（ようらん、揺りかごの意味）であると思います。

罫堂塾での学びは十カ月にも満たない短期間ですが、その中で尾崎の信念や目指したものに触れ、それぞれの志を育んでいくことができます。

冒頭に触れました、政治や選挙におけるインターネット発信の中でも見逃されがちで、けれども大事なことは何か。私からお伝えする必要はないでしょう。それぞれの立場や考え方で何かひとつでも感じて頂くことがあったならば、それが答えだからです。長時間にわたりましたが、拙い話にお付き合ひ頂き、ありがとうございます。以上で私の講義を結びたいと思います。

(了)